

「身体的な感性」の概念化に関する論考

鈴木裕子

I. はじめに

「幼児の“身体的な感性”を育むための実証的研究」は、保育現場において、子どもの「身体的な感性」の育ちの様相を捉え、感性の形成や発揮の過程についての介入研究を進める方向から、子どもたちの身体的なコミュニケーションを機能させ、豊かに育むための環境づくりを実証的に検討することが最終的なねらいである。

本稿は、「身体的な感性」という概念の有効性を論考する。

第一の目的は、感性に関する既存の理論、特に身体に強く焦点を当てた場での感性の意味や機能についての理論を整理することである。保育を取り巻く領域に目を向け、哲学、美学、芸術、工学、心理学、教育、体育学などの領域、あるいはその他の社会生活の文脈を概観する。

第二の目的は、今後、保育の場において、身体的な感性を育むための実証的に検討を進めるために、第一の論考と合わせて、「身体的な感性」という概念が実践と結びつく可能性を論考することである。

II. 研究の経緯と問題の所在

筆者は、これまでに身体的なコミュニケーションとしての模倣の有効性に関する研究を行ってきた。我が国の重要課題のひとつ、教育の改革の背景には、学力の低下だけでなく、他者とのかかわり方の不具合すなわちコミュニケーション能力の不足に端を発した「社会で生きる力」に関わる問題が存在する。問題として顕著に現れるのは就学以降であるが、他者とかかわることの基礎がつけられる乳幼児期に身体を通したコミュニケーションが円滑に行えるような環境づくりや支援を行うことが重要という問題意識に動機づけられていた。

そこでは、幼児期の他者との相互行為としての「身体による模倣」に着目し、身体的コミュニケーション力としての模倣の機能と役割を検討した^{1,2}。

身体による模倣によって、他者との相互行為が活性化する機能が多様に捉えられ、身体双方向性のもとで他者とのほどよい一致を生み出す役割が実証された。その結果、保育という場における身体による模倣の有効性が示された。

そこで避けられなくなった問いが、幼児にとって身体による模倣発現や、身体の相互行為に深く関わる力とは何か、すなわち「感性」とは何か、限定するならば、子どもが「他者を含めた様々な環境に身体でかかわるための感性」とは何かということであった。

保育という場において、「感性」という言葉は、子どもの姿を様々に捉えられる包括的で響きのよい言葉として用いられている。ではどのような行為が、感性の豊かさに基づくものであるのか、さらには「感性を育む」ことはできるものなのか。青年期以降で感性の用語が用いられる場合、「感性を磨く」「感性を研ぎ澄ます」という表現を用いることが多いが、ならば感性は幼児期に育まれ、それ以降で磨かれ研ぎ澄まされることになるのか。「感性」の実態は何か。このような率直な問いに答える材料を十分に蓄積してきたとは言えないのではないか。

そこで、幼児期において感性とはどのような行動様式として現れているかを明らかにし、どのような仕組みや働きを持っているのかを検討することを目的とし、そのツールとして「幼児期の感性尺度」の開発を試みた³。それによって、感性とは、自己の内奥にのみ向かうのではなく、他者を含めた社会や環境に向かっており、自己の社会化の程度すなわち自己理解と他者理解の程度が、感性の形成や発揮を規定していると考えられた。その意味で、感性は他者とのコミュニケーションを促進させる基盤となる可能性が見出され、幼児期の感性を社会へのかかわり方という核によせて検討を重ねる意義が認められた。

以上のように、筆者の「幼児期における身体的

コミュニケーションの活性化」の関する研究は、「身体による模倣」と「感性」の機能を明らかにするという2つの方向を経て現在に至る。しかし、未だ「身体による模倣」の発現基盤に「感性」を明確に位置づけることには説明のつきにくい部分もある。その理由を考えると、これまで「身体的コミュニケーション」は、一般的に非言語コミュニケーションという呼称で「身体」を他の諸事象と一括りにしてきたため、その実際が捉えられにくいことが考えられた。そこで本稿では、「身体的な感性」という概念を、感性、身体、コミュニケーションの関係から論じる。

Ⅲ. 「感性」を捉える

1. 「感性」という用語

日本語の「感性」という用語は、明治期にドイツ語の「*Sinnlichkeit*」を翻訳したものとされる⁴。また、「*aesthetica*」を、日本では哲学の一領域としての「美学」と訳した^{5,6}が、西欧では「美学は感性認識の学である」とし、自然美と芸術美に関する学問として「感性的認識論 *scientia cognitionis sensitivae*」と位置づけてきた⁷。

一方、「感性」は、感受性 (*sensibilities*)、感度 (*sensitivity*) 印象 (*impressions*)、心地 (*feelings*)、感情 (*emotions*)、感度 (*sensitivities*)、感覚 (*sense*)、直感、直観 (*intuition*) など、幅広い含意を持って語られている。それらの用語は、いずれも「感性」の持つ性質や機能の一部を示すものと考えられる。そのような性質や機能を示すものは、欧米での用語で示しても、「感性」そのものに該当する用語が見当たらない。その意味で、「感性」は、日本で生まれた概念とも言われる⁸。したがって、感性についての教育研究は、我が国が先導的に展開できる可能性をもった領域という考えも示されている。

2. 「感性」の定義と「感性」研究の背景

「感性」の研究は、哲学、美学、芸術、工学、心理学、教育、体育学など、様々な分野で行われている。そこでの感性へのアプローチは、感性の定義を論考することと、各分野における理論を展開させるなかで、感性の意義や有効性を検証することが中心となっている。

「感性」は、日本人にとっては共通理解を得やすい、なじみのある概念とされるが、一方で、その共通理解とは、直感的で感覚的、感情的、曖昧、不確実な理解に留まっている。各分野において、その論を展開させるための操作的な定義が諸々試みられているが、最終的には未だ一致した定義を持ちにくいという見解で共通している。したがって、分析や論理をベースとする学問あるいは科学の検証対象になりにくいことも共通して述べられてきた。

たとえば、感性工学や心理学の分野で支持を得た「感性」の定義に「物や事に対する感受性。とりわけ、対象の内包する多義的で曖昧な情報に対する直感的な能力。よいセンス」「人の気持ちやモノの味や色やイメージといった曖昧なものを直感的・洞察的にとらえる認知・情緒的能力特性」というものがある⁹。ここにおいても、「感性」は、「曖昧」で「直感的」であり、「明確にはできない対象を、直感的に処理することのできるセンス」ということになるのである。

また、「感性」が科学的な検証対象になじまなかった原因として、「感性」が個人内の特殊な能力、あるいは特殊な個人が持つ能力として理解されてきたことにも由来する。「鋭い感性」「豊かな感性」のような表現に見られるように、個々の複雑な経験や心の働きから形成されるものを、論理として扱うことは普遍的でないと考えられてきた。それは、「感性」には先天的な部分と後天性の両側面がある¹⁰という理解、換言すれば、感性は先天的な能力なのか後天的に獲得できる力なのかの問題とも関連している。そのような曖昧な対象を扱いにくいのは、情報科学などの分野では自明であったが、むしろ教育の分野においては、それを視点や媒介にすることを意図的に避けてきたという背景を持っている。

Ⅳ. 「感性」の意義の転換

近年、「感性」は、その意義を三つの視座へと転換させている。

1つ目は、「感性」を、「理性」や「知性」と対極的に扱うべきでないという視座であり、2つ目は、感性と感受性を同義に扱わないという視座、3つ目は「感性」を、環境や社会に対して能動的、

創造的にかかわる能力として捉える視座である。これらは相反する方向に向かうものではなく、1つ目を前提としたうえで、2つ目の「感性」は「感受性」と同義という見解を超え、さらには3つ目の個人的のものとしてきた「感性」を社会的に捉えようという段階へと、同じベクトル方向の転換と考えられる。以下、それぞれの流れを素描する。

1. 理性、知性と対極でない「感性」

桑子¹¹、水野¹²は、カントの哲学と美学の研究動向から、自然法則に至る人間の知的な営みの基礎に感覚的な経験を置き、「感性」を外界からの情報を理性に手渡す能力としていると指摘する。バウムガルテン¹³が感性論を下位の認識論と規定したことに対して、主観の形式にもとづいて感性情報は捉えられるというコペルニクスの転回を行っているが、それでもなお、感性は法則的認識の下位に位置づけられた¹⁴。また水野は、人の行動には感性的エレメントが大きく働いていることが日常生活を顧みれば当然のように頷けるにもかかわらず、従来の哲学は、感性と区別された理性、悟性、概念をめぐる転回され、感性はそれらを補完するものとして扱われてきたと問題点を浮き上がらせている¹⁵。感性を人間の活動原理として中心的な位置に置くならば、感性論の展開が不可欠としたが、一方でただ感性を理性から切り離して、感性の優位を強調すればよいわけではないことも指摘する。そのためには、感性が理性に追隨して語られるのではなく、あくまでも感性として語られるまでに陶冶されることの必要性を強調する。

同様に、宮脇¹⁶は、感性から分離した知性を考えること自体を「近代化がもたらした過誤の集積」とした。それを受けて、山木¹⁷は、感性と知性・理性は対立するものではなく、共通する側面を持つとしながらも、その統合は、感性と知性の対立論を前提にしている限り、安易な操作論に陥る可能性があることを危惧する。教育の現場での、教育と芸術の分離の克服として、教科間の授業時間数の調整などの解決では、本質は隠蔽されると述べる。

かつての身体と精神の二元論、感性と知性の二

元論、教育の場での、芸術と教育の分離、それぞれが一応の解決を経ているかのようだが、ことさら、「感性」については曖昧だ。たとえば、舞踊・ダンスは芸術なのか体育なのかと言った論議が巻き起こったのは、舞踊・ダンスの表現媒体が身体であり、主体と客体が一体であるという特性に由来した。美しいと感じられる身体や動きというものに客観性が存在するのか、さらにはそれを知覚し判断する感性にはどのような主観的な前提が満たされ、客観的な基準が存在せねばならないのか。それら一切が、一見「客観的である」と思われても、「主体の経験とひとつの個別な感覚の結果」¹⁸でしかない相対的なものに帰結するという性質を認めねばならない。詩人コクトー¹⁹の「芸術において証明される価値はすべて俗悪である」という言葉は、このような感性の持つ価値の脆弱さを衝くようだ。

以上のように、「感性」を理性、知性と対極でなく、それ以下でもないことを認めながらも、その時点では、「感性」を実在的に語りにくいという側面が残された。それは、その価値を認める対象が見えにくいことに由来するのだろう。

2. 感受性と同一でない「感性」

感性の持つ意義の転換は、多義にわたる感性と同義的に扱われてきた用語を、感性から削ぎ落とし、感性の中味をむき出しにする作業のようにも感じられる。最も強調されたのは、「感受性」は、感性と同一でないという見解である。それは、感性は必ずしも受動的でなく能動的でありうる、したがって感受性という言葉に置き換えるのは不適切というものである。

なぜ、今まで受動性ばかりが強調されたかについては、前節で述べたように、感性をめぐる哲学的な考察が、理性的認識を基準にしてきたからと説明される。さらに近代では、心理学において、感性の働きを、刺激→反応説(S-R理論)に従って動く感受性と捉える²⁰ことが多かった。反応は実験観察の対象となるが、認識や判断等々では、科学的に捉えにくいからである。

現在のところ、感性は、能動的で主体的、永続的な人間的な能力²¹という見解に、理論的にはほぼ集約されている。

ただし、実際の社会、少なくとも教育や保育現場では、この点の認識が共有されているとは言えないように思う。筆者の調査においても、感性は感受性あるいは「受信アンテナの役割」と前置きしたうえでエピソードを記述した保育者が多く見られたことから推察される。

3. 社会的な「感性」

理性、知性と対極でなく下位でもない「感性」の価値を認める大きな鍵は、感性の本質が社会志向的であるという視座に得られる。

水野は、感性は人間の広範な事象にわたって発揮されるものであり、美的感性、道徳的感性、政治的感性など相即不離に相互作用的な側面を有し、感性は社会的に形成されると提起している²²。このような形成過程は、音楽的な部族と言われるアフリカ南部のヴェンダ族の例で示されている。彼らは協力や共同の社会的経験の共有を目指した儀式のなかで、音楽に身近に接する環境を有する。そのなかで形成された感性は、ヨーロッパ音楽に対して等しく反応する音楽的感性ではなく、彼らの社会の中で彼らの五感を含む身体が蓄積してきた社会的な感性を背景にして形成されたものと例示している²³。

このように感性の本質的な価値を示唆したうえで、ひきつづき、このような感性は、どのように発現するかという点にも言及する。

私たちという社会的存在が私たちの感性を規定するのであり、人間の社会的なあり方と感性とは相即している。したがって感性は本来、社会的感性と言い換えられると端的にまとめる²⁴。また、そこでの感性を、味覚、聴覚、視覚、嗅覚、触覚のいわゆる五感としての感覚器官と重ね合わせて考える必要があると説き、さらに、それらに共通する感覚を、共通感覚とし²⁵、個々の感覚の根底に存在するものとして具体化している。

小林²⁶の「感性学」は、感性を強く豊かにするというねらいをもって、さらに直接的である。感性の問題を個人から社会へと大きく広げて捉え、同時に、感性の問題を社会とも含めて「身体」の問題と結びつけることによって、感性が身体とどう関わっているのかを論じた。特に、社会的感性を、「観性」という独自の用語に位置づけ、「観性」

を、人間の社会的身体という側面から生れる観受性を通じて働く直観的、客観的認識力（判断力）とした。観性（社会的身体の感性）を強くし、その判断を的確にするためには、観性を「身体ばなれ」させないで身体にしばりつけておくことが必要であり、感覚とは体感（シニスティジア）「身体ばなれ」しない感覚であるがゆえに、体感だけが身体と感性の両面で一番頼りになる感覚と述べている。各論を普遍的に理解するには少々困難な部分があるが、感性を社会と関連づけ、社会とは身体の共同体であるとし、社会のなかで生きる自分という意識を持つことの有用性への提言には、本研究における身体的なコミュニケーションを育むという課題に通じる視点が得られる。このことは、山木²⁷が、感性は人間関係の中で問われ尊重される能力であり、その意味では人と人が相互に認めあう基礎的な力、物事の価値だけでなく、自己と他者の相互の価値を十分に感じ取れる力と述べることにも裏打ちされる。

以上、「感性」の位置づけや価値を、個人のそれから社会のそれへとより拡大的に捉えようとする動向が確認された。そこで次に、感性の実態を明らかにしようと、これまでのパラダイムを超えたアプローチの仕方を模索する様々な事例を捉え、「感性を育む」ことが可能かという問いへの検討を行いたい。

V. 「感性」を身体のかかわりを焦点として可視化する

「感性」を育むということが可能なのかという課題に接近するために、「感性」を可視化することを目指した研究が多方面で行われはじめた。ここでは、身体教育、スポーツ、教育、感性工学の分野に絞って、身体を焦点にして感性を可視化しようとした研究を概観する。

1. 身体感性論に見られる感性と身体のかかわり

樋口^{28,29}は、「美」という視点を複合させ、「身体」を重要な視座として、思想の問題として「生きる力」を論じようとした。そこでは、ジェスターマン³⁰の「身体感性論」を援用し、身体教育という主題学習論として見た「身体感性論」の意義と可能性を論考した。

「身体感性論：somaesthetics」は、soma＝ギリシャ語の「身体」と、aesthetics＝通常は「美学」ここでは「感性論」を合成して作られた言葉であり、身体の実験と使用についての批判的、改良主義的研究(ameliorative study)を行うひとつの学問と位置づけられている。改良主義的研究とは、身体をより良いものへと変えていくことを意味し、「より良い身体」とは、鋭敏な感覚を持った身体、感覚の機能が高められた身体とした。シェスターマンは、身体を基軸にして世界を認識し、自己を知り、幸福を追求することが哲学の課題を解決することになると語り、身体を「感性的受容」と「創造的自己形成の場」と捉えるという前提に立って、身体感性論を成立させようとしている。

また、「身体的感性論」では、第一の次元：分析的な身体感性論(身体に関する存在論、認識論)、第二の次元：プラグマティックな身体感性論(身体訓練法)、第三の次元：実践的な身体感性論(実践そのもの)の三つの基本的次元を展開させている。特に、実践的な身体感性論を、「身体感性に関する知」の実践とし、教育的価値を見出している。その意味では、「身体感性論」は「論」でなく、「身体感性に関する知」を追求する学問と樋口は解釈する。

その身体感性の知が身体への気づきを鋭くする教育によって、感情や情緒を制御し、運動や行為を制御し、習慣を改良し、自分に自信を持つという、いわば自己の再構成が果たされる。シェスターマン自身は、フェルナンデスクライス・メソッドの実践経験を背景にしていると言われるが、具体的な方法論や方法の構築には立ち入っていない。シェスターマンは、身体感性に関する知が展開する可能性を、「体育」という教育に探ってみようとしたが、当時の体育の指導法は自己の身体への気づきを減じる方向にあるとし、否定的であった。その意味では、身体感性論は従来の体育への批判的検討でもあったが、教育にどのように取り入れられるかを取り上げるまでには至らなかった。

「身体感性論」によって、「感性」を身体と結びつけて捉えるという視点が提示され、理論と実践、哲学と身体教育の融合という可能性が拓かれたが、一方でそれが容易ではないことをも示唆された。樋口は、「どんな知識も学び手の身体的な活動に

具体化され、学び手の経験のなかに織りこまれることなしには「学び」としての意義をもちえないだろう」という佐藤³¹の「学びの身体技法」を援用して、「身体感性論」の課題を示した。一方で、近年の我が国での体育教育における「体ほぐし」³²ならば、体への気づきや仲間との交流などの視点から、身体感性論と結びつけることが可能ではないかと展望している。

2. スポーツと感性：内面の感覚器官としての感性

「感性」を、スポーツという分野のなかで具現化しようとした研究に目を向けてみたい。「スポーツ」は、身体教育が具現化する有力な場所³³とされており、特にトップアスリートは、ベストパフォーマンスを生み出すために「感性を磨く」ことに貪欲であり、その重要性を痛感している。したがって、この分野では、感性の定義を論じる以上に、感性を磨く、さらには感性を育むという臨床や方法に関心が注がれる。

志岐^{34, 35, 36, 37}は、「情報を受け取り、処理し、発信する、という一連の情報処理過程を無意識に行う内面の感覚器官」と感性を定義し、アスリートの望ましい感性を、「自己実現への追究力」としている。これまでの感性論との違いは、感性を「内面の感覚器官」と表現しているように、感性そのものの実態を捉え、身体が為すべき行為の開発を前提としている。

そして、感性の仕組みとして、感性には受信と発信のアンテナがあるとし、受信アンテナによって受け取った情報を無意識に判断処理し、発信アンテナによって発信する、この情報処理過程に様々な心理的要因や行動様式がかかわっており、人間関係や環境要因が絡むために、感性には、先天的な部分と後天的な両側面があるとする。先天性に当たる潜在的な力を発揮し、ベストパフォーマンスを遂行するためには、幼少期から感性の働きをどのくらい活発にできる環境に身を置くかにかかわる。そして、アスリートの意識が「集合的無意識」の領域に至ったとき、「感性」による情報処理、情報交流は最大限活発になる。「集合的無意識」とは、「個人的無意識」よりさらに深い部分にあり、個人の枠を超え、人間だけでなくすべての生

命体や物体までもが結びつけられている領域である。自分という個人の意識が取り払われ、意識が拡大していく。したがって、「無意識」を育み、磨くことによって無我の境地を得た時に、感性は最大限発揮され、アスリートはベストパフォーマンスが遂行できると説く。そのために、何をどう育み、磨くのか。アンテナを拡大させ、自分という意識の枠が完全に外れることによって、自他の区別がなくなり、他との一体化を可能にさせることが必要となる。

柔道選手の組み方のエピソードを例に、勝利のためには、自分自身に都合が良い組み方すなわち「利己性」への意識では勝てず、戦う相手との間に「共感性」や「利他性」といった要素が必要となるとし、それこそが感性レベルの情報交流と捉えている。五感によって受信した情報を感性のフィルターにかけ、必要な情報を取捨選択する。その際には、自己だけでなく他者の存在が必要になると指摘する。そのことは、ジュニアアスリート対象の調査において、日常面のコミュニケーション力と競技面の競技調和性（チームメイトや指導者との調和的姿勢）、日常面の非共感性と競技面の競技エゴイズム（チームメイトとの協調性に欠ける独善的な考え方や姿勢）の間で有意な正の相関が示された報告からも具体的に裏づけている³⁸。「自己実現的人間」は、共感性や他者との一体感が強いことが示される。近年、多くのアスリートが「感謝」を口にする。「集合的無意識」の領域に至ったとき、「感性」による情報処理、情報交流は最大限活発になり、自分以外の存在の力を感じるというということに通じる、まさに感性レベルの受信と発信の一連の過程から生み出される感情であり行為であるとして、この「感謝」を意義づけるのは飛躍しすぎであろうか。

以上のように、内的な感覚器官を「感性」とし、それを発揮させ遂行する媒体を「身体」に位置づけたことによって、感性を育むことや磨くこと、さらには発揮させることが可能という展望が示された。志岐の研究は、特にトップアスリートを対象としているが、それは、特殊な感性を対象としているというよりも、より典型性が高い状況を捉えて論じていると捉えられ、教育としての「感性」、本研究における幼児の「身体的な感性」の具現化

への示唆に富む。

3. 従来の学問領域を超えて捉えられる「感性」

2009年（平成21年4月）には、九州大学大学院統合新領域学府に「ユーザー感性学専攻（Department of Kansei Science）」が設置された³⁹。知の活用主体であるユーザーの視点から、また感性を基盤として人間理解の上に立って、感性価値の創造を推進する高度な専門人材の養成という理念を掲げる。「ユーザー」とは、自然、社会、人文科学や技術の知を使い役立てる個人、グループ、組織などを指す。また、「感性」を外界の事象（人・もの・こと・場）に対する感受性および感受性に基づく統合的な心の働きと定義し、その感覚的、感情的、直感的、創造的という特性に注目し、ユーザーの視点に立った人間理解の上に教育研究を「ユーザー感性学」と定義している。技術と感性が融合した新たな価値創造の仕組みと担い手の育成（感性価値クリエーションコース）、感性を基盤としたコミュニケーション力・共感性を育み表現する（感性コミュニケーションコース）、人間性の基盤、創造性の源泉である“感性”に関する科学的探究（感性科学コース）の3コースを置く。特に感性コミュニケーションコースでは、感性を基盤としたコミュニケーション力・共感性の育成をめざし、教育、医療、福祉現場などで感性に配慮したサービスを行う教師、医師、看護師、チャイルド・ライフ・スペシャリスト、ケアマネジャー、あるいはその調査・企画研究者への進路を示している。ある種の専門的な人材育成を、「感性」を多角度に学際的に扱うことによって遂げようとしている。

これより先、1999年には、哲学、教育学を工学のカテゴリーと融合させようと日本感性工学会が発足している。感性哲学部門や感性教育部門があり、従来の哲学や教育学という学問には容易になじまないトピックが、従来の学問領域を超えて議論されようとしている⁴⁰。感性を「KANSEI」のまま用いたところにも、新たな観点と意図が示される。そのなかで、2006年、「語り出す身体」というテーマのもと、映像、動物、脳科学、ロボット、遍路、教育、建築、都市、伝統芸能などの各専門家が、“多様な場”から、「語り出す行為」に

秘められた「身体性」を紐解き、人間の感性を理解しようとしたことは興味深い。語り出す行為には、聴き手（他者）の価値観、空間性、運動性、時間性が強調され、必ずしも言語が必要でないために、「身体性」と切り離すことができない何か潜む。それは、「働きかける＝かけられる」という関係が動き出す直前に存在する“沈黙”という瞬間だとし、身体がある限りにおいて、“対話”を通して、「私自身」を変えられることができると総括する⁴¹。

次いで、教育のなかで感性を可視化しようとした研究のひとつ、三重大学 COE (B) Kansei プロジェクトによる「感じる力のプロセスの可視化」を概観する。そこでは、子どもの感性を可視化し、討論するツールとして「感じる力のフレームワーク案」が考案された⁴²。感性を「価値判断を伴った方向性や能動性を持った働き」と規定し、授業の場は「感性情報の交換の場」とする。子どもたちの感性は未分化なエネルギーとして存在するために扱いにくい。子どもたちの語り出す身体には、担任の教師の身体行為、表現、感性が映し出されることがあるというダイナミックな状況を前提としたうえで、授業内で一人一人の子どもが異なる感性を持ち、異なる方向を持つことを読み取るためのツールの開発を試みている。教育の世界で「感性」という言葉がクローズアップされてきた要因は、言語や記号を媒介にした知識の伝達だけに終わらない教育を希求したこととされ⁴³、感性を可視化することは、子どもに効率よく記憶する能力だけでなく、ゆっくりと主体的に経験する力を身につけさせるための方策を考え、それを捉えていくことが求められる。そこに至る過程を整理する方向で、子どもたちの感性と身体的作用の実際を検討していくことは、大きな意義があると思われる。

また、人間環境学の分野から、組織における人材育成方法としての OJT（職場での実務訓練）を、身体性の変容の視点から考察する研究⁴⁴が見られた。そこでは、組織的知が転移するためには、組織という場での身体性の共有が不可欠であることが述べられている。身体が空間に埋め込まれ、他者と共振するという基盤のうえで、即興的にやってみるということによって機能しはじめる「関係

的身体」の有効性を示し、身体性を欠く OJT への問題提起を行っている。

「身体」や「身体感覚」を核として語ることによって、感性の可視化を実証していこうとするこれらの研究からは、「感性」はすなわち「身体的な感性」であることを示す思索にふれることができた。

4. 感性を科学する

感性を科学として捉えるために、認知心理学、脳科学、情報科学・工学、情報処理システムなどの分野から、いわば学際的なアプローチがなされている。そこでは、間⁴⁵、気配⁴⁶、ジェスチャー⁴⁷、表情⁴⁸、手の握り感覚⁴⁹、声⁵⁰、美しい運動⁵¹などを感性情報とし、コミュニケーションにおける感性の役割、ヒトが知覚・認知する感性特徴の分析、身体運動や動作と感覚との相互作用の分析などを試みている。これらは、ヒトとヒトのかかわりの心地よさの生起の要因を明らかにし、その成果を感性工学に活用し、新しい商品開発やシステムの構築、感性ロボティクスなどへの応用を構想するものである。インターネットなどの IT 技術や情報機器の活用により、豊かな社会の形成を図ろうとしている。

一見すれば、ヒトの感性とは、かけ離れた距離にあるような工学や IT、ヒューマンインターフェースの分野において、細やかな感情が表出する身体のあり様や、身体の仕草などを感性情報と捉えていることがわかる。そこでは、感性の価値が、ひととひととを結ぶコミュニケーションの主因として意義付けられており、心が通う状態を様々な身体感覚から解明しようとする視点を鮮明に浮かび上がらせていた。

VI. 幼児の感性としての「能動的応答」

筆者は、幼児期において感性とはどのような行動様式として現れているかを明らかにし、どのような仕組みや働きを持っているのかを検討するための手がかりとして「幼児期の感性尺度」の開発を試みた⁵²。その結果、「独自の感受と創出」「能動的な応答」「情緒的・道徳的な共感」が、幼児期の感性に関する因子として抽出された。

その後、2 幼稚園において、本尺度を用いた介

入効果の測定を試行した。今後、保育の現場において、この感性尺度をより有効に活用するために、いくつかの不足部分と課題が認められた。そのひとつとして、評価した保育者によって差が生じる原因として、感性尺度因子内の各項目の解釈の違いが認められた。そこで、因子内の項目の内容が、子どもの生活のどのような場で見られ、どのように展開していくのかを、再度事例を通して考察し、その項目が意図する感性の意味について分析、論証を行った。特に保育者間で解釈の差異が生じやすかった「能動的な応答」因子8項目(表1)に焦点を当てた。事例は2010年1月～2011年3月、愛知県私立幼稚園での観察と担任保育者への聞き取りにより収集した。

1. 「能動的応答」を支える視点

① 身体性という視点

【事例1】雨の日、男児ら(5歳)が、大型積み木からジャンプをする遊びを繰り返す。トシオが、大型積み木から飛び降り、次の飛び降りた男児の姿を振り返って見た後、「雨(つぶ)みたい」と言う。その自分の言葉をきっかけにして、自分が雨粒になったかのように、両腕を頭上に伸ばして飛んだり、両手を頭に載せて膝を折って飛び降りたり、いろいろな跳び方を楽

しんでいた。

【事例1の分析】「R1 じっと考え込むよりも動きながら考える」「R2 何かをするとき、からだをいっぱい動かしている」の項目に該当する行為が読み取れる。子どもが、自身の身体の動く感覚で受け止め、外部の状況と融合させ反応させている様子である。

【事例2】アキラは、虫を見つけた時には、いつもよりもずっと目を輝かせ、夢中で虫の動きを観察する。観察して気付いたことを、手の動きなどで「こうやって動いたよ」と自分なりに表現をする。

【事例2の分析】「R8 自分にとって大事なことが自分の心の中心になる」「R5 何でもやりたがり見たがったりする」「R2 何かをするとき、からだをいっぱい動かしている」「R1 じっと考え込むよりも動きながら考える」の項目に該当する行為が読み取れる。好奇心や興味の旺盛さ、それによって得られた喜びや感じた想いの豊かさは、身体の動きによって現れる。

【考察】

能動的として捉えられる行為では、「身体」の存在が大きな意味を持つ。「身体性」は、その状況、文脈、他者があってこそ存在する性質と考えられる。つまり、身体が、時間の中で、空間に埋

表1 幼児期の感性尺度：第Ⅱ因子「能動的な応答」の項目と概念
各項目で想定される「身体性を支える要素」

	尺度の項目	尺度項目の上位にある概念	身体性を支える要素		
R1	じっと考え込むよりも動きながら考える	身体が動く感覚と融合させる	運動		空間
R2	何かをするとき、からだをいっぱいに動かしている	身体感覚で受けとめ反応しようとする	運動		
R3	思いつくとすぐに行動する	直感的に捉える	運動	時間	
R4	音楽や音を聞くとすぐに反応して歌い出したり踊り出したりする	五感で受けとめふれあおうとする	運動	時間	
R5	何でもやりたがり見たがったりする	好奇心と観察力をもって受けとめる	運動		空間
R6	周囲を喜ばせようとしたりその場を盛り上げようとしたりする	周囲や他者を喜ばせようとする	運動		他者
R7	表情が豊かで自然に感情が溢れる	感情(喜びなど)が満ち溢れる	運動		他者
R8	自分の好きなことややりたいことがはっきりしている	自分にとって大事なことが自分の心の中心になる	運動		他者

め込まれ、他者と関係し、運動として現れる、という要素の相互作用の結果、感性として可視化されることが示唆された。表1には各項目で想定される「身体性を支える要素」を示した。

② 自身の世界を他者と共有することを可能にする感覚

【事例3】園外に出かけた時、男児(5歳)が、道端にころがっている2つの石を拾い、その2つを打ち合わせ、自分の耳に石を押し付けるように当てた。「先生、耳に当ててみて!」と2つの石を、保育者に近づけてきた。保育者は、その石に右耳を近づけた。男児は、さらに石を近づけ、保育者の耳に当てた。男児が、石を打ち合わせると、コツンコツンという音が聞こえる。男児は「なんか、いつもの石と違ったきれいな音じゃない?」と、嬉しそうに言う。その後も繰り返し石を打ち合わせて聞かせてくれた。

【事例3の分析】この事例では、「能動的な応答」因子の8項目の状況がそれぞれに読み取れる。好奇心と観察力をもって直感的に(身体)でやってみる。五感で受けとめふれあおうとしている。その対象は自分にとって大事なこととなり自分の心の中心になる。それによって、感情(喜びなど)が満ち溢れ、他者に対しても率直に表す。他者とその喜びを共有したくなっている。

【事例4】カオル(4歳女児)は、紙芝居、絵本、お話など、とにかく大好きで、その場に合わせた様々な反応をする。そのことをしっかり覚えていて、後日その話を他者に事細かに話す。経験画も得意で「イルカショー」でイルカがビーチボールにタッチしている絵の生き生きした様子は大人顔負けだった。

【事例4の分析】カオル(4歳女児)は、とにかくあらゆることに反応が大きいというのが保育者の印象であった。その反応の大きさや豊かさは「R2何かをするとき、からだをいっぱい動かしている」「R7感情(喜びなど)が満ち溢れる」あるいは「R4音楽や音を聞くとすぐに反応して歌い出したり踊り出したりする」で読み取ることができ、それによって他者とその喜びを共有しようとしている。カオルにとって、その対象は、いつも自分にとって大事なこととなり自分の心の中

心になる。それらを、「話す」「描く」などの動きの身体感覚と融合させ、五感で受けとめふれあおうとしている。

【考察】

「能動的に応答する」とは、身体性を基盤として、運動的、感覚的、イメージ的なものが統合され、他者に向かう行為ということが示唆された。先行研究で示された感性の側面「感受と交流」「判断と志向」「創出と伝達」の働きとしての、対象を受け止め、自身のなかで構想し、外部に出力するという様子が再確認された。3側面が活発に還流して展開することが不可欠である。その還流では、子どもたちの感情の表出がエネルギーとなっていることも事例からうかがえた。同時に「応答する」とは、自身の世界を他者と共有させる感覚によって発現する行為であることが示唆され、自己の社会化の程度が感性の形成や発揮を規定していると考えられた。

2. 「身体的な感性」を育むために

「能動的な応答」因子のなかの8項目に関する考察から、幼児の感性を「身体的な感性」という言葉で捉えられる可能性が示唆された。また「感性を育てることは可能なのか」という問いを、「どのような体験を積み重ねればいいのか」という具体的な問いに置き換えてみると、その答えのひとつに「他者との意識の共有を促す経験」の重要性が示唆された。

VII. 「身体的な感性」研究の展望

本稿は、「身体的な感性」という概念の有効性を論考することを目的とした。感性に関する既存の理論、特に身体に焦点を当てた場での感性の意義や機能を考察した。

はじめに、感性の定義、意義とその変遷を概観した。「感性」は、多くの日本人にとっては、感覚的な共通理解を得ており、各分野において操作的な定義が諸々試みられているが、最終的には未だ一致した定義を持ちにくいという見解で共通している。論理や科学の分野では、曖昧な対象を扱いにくいのは自明であろう。教育の分野においては、「鋭い感性」「豊かな感性」のような表現に見られるように、個々の複雑な経験や心の働きから

形成されるものを、理性や知性とは対極にあるものとして意図的に避けてきた歴史が見られた。

しかし近年、「感性」は、その意義を三つの視座へと転換させている。1つ目は、「感性」を、「理性」や「知性」と対極的に扱うべきでないという視座であり、知識偏重の教育の転換がその背景になった。2つ目は、感性と感受性を同義に扱わないという視座であった。山口⁵³は、「最近の子どもたちは与えられた情報を操作する能力には長けているように見えるが、自分自身から情報を発することは不得手で、表現することを、自身が思うほどにはできていない」と指摘している。教育や保育の場での現状は、「感受する」ことに重点が置かれてきたように思われる。

筆者の開発した「幼児の感性尺度」における『独自の感受と創出』因子13項目⁵⁴を見ると、幼児の場合には、受け止める力と表す力は、別の性質や能力として捉えにくく、一般的に捉えられる大人の創造力の中身ほどには独立した役割をもって捉えられていないことがうかがえた。大人の場合では、「物事の見方が鋭い」ということと「表し方が巧い」ということは、異なる性質として捉えられる場合があるが、子どもの場合には、連結した力と捉えられた。したがって「感性」を育むとは、「感受する」力だけでなく、「表す」力を伸ばすところまでの一貫した援助の必要性が示唆された。

3つ目は「感性」を、環境や社会に対して能動的、創造的にかかわる能力として捉える視座であり、感性の本質が社会志向的であるというものであった。感性は人間の広範な事象にわたって発揮されるものであり、人間の社会的なあり方と相即している。したがって感性は社会的感性とも言い換えられる。また、そこでの感性の問題を社会と関連づけることは、ひいては「身体」の問題と結びつけることであり、様々な分野において、感性が身体とどう関わっているのかを論じることへと向かっていった。そこでは、感性を社会と関連づけ、社会とは身体のコミュニティであるとし、社会のなかで生きる自分という意識を持つことの意義を、感性という視点から浮かび上がらせていた。

そこで次に、身体に焦点を当てることで、感性を可視化しようとした研究に着目した。「身体感

性論」によって、「感性」を身体と結びつけて捉えるという視点が提示され、理論と実践、哲学と身体教育の融合という可能性が拓かれようとしていた。また、スポーツにおける感性という分野では、アスリートが、ベストパフォーマンスを生み出すために「感性を磨く」ことの重要性を示し、そのための臨床や方法を検討しようとする動向が見えた。特に、内的な感覚器官を「感性」とし、それを発揮させ遂行する媒体を「身体」に位置づけたことによって、感性を育むことや磨くこと、さらには発揮させることが可能という展望が示されていた。

学界では、感性を学際的に扱い、規定の学問領域や研究方法に囚われないアプローチが行われ始めた。教育界においても、感性を「価値判断を伴った方向性や能動性を持った働き」と捉え、子どもたちの未分化なエネルギーが発揮する身体との関係をダイナミックに捉える試みが見られた。また、ヒトの感性とは離れた分野にあるような工学やIT、ヒューマンインターフェースの分野において、細やかな感情が表出する身体のある様や、身体の仕草などを感性情報と捉え、感性の持つ価値を、ひととひととを結ぶコミュニケーションの主因として意義付けていた。「身体」や「身体感覚」を核として語ることによって、感性の可視化を実証していこうとするこれらの研究からは、「感性」はすなわち「身体的な感性」であることが示されていた。

最後に、幼児期において感性とはどのような行動様式として現れているかを明らかにし、どのような仕組みや働きを持っているのかを検討するための手がかりとしての「幼児期の感性尺度」に触れた。特に、「能動的な応答」因子に着目し、能動的として捉えられる行為では、「身体」の存在が大きな意味を持つことを考察した。「身体性」は、その状況、文脈、他者があってこそ存在する性質と考えられ、身体が、その時間の中で、空間に埋め込まれ、他者と関係し、運動として現れる、という要素の相互作用の結果、感性として可視化されることが示唆された。同時に「能動的に応答する」とは、身体性を基盤として、運動的、感覚的、イメージ的なものが統合された他者に向かう行為ということが示された。自身の世界を他者と

共有させる感覚によって発現する行為であり、自己の社会化の程度が感性の形成や発揮を規定していると考えられた。「能動的な応答」因子に関する考察からも、幼児の感性を「身体的な感性」という言葉で捉える意義が明らかになった。

平成 22 年 5 月に文部科学省副大臣主催によるコミュニケーション教育推進会議⁵⁵が開催された。そこでは、多様な価値観を持つ人々と協働しながら社会に貢献することができる創造性豊かな人材の育成が明示され、子どもたちのコミュニケーション能力の育成が必要であることが指摘された。近年、コミュニケーション能力の一端としての対人スキルは、言葉を使用するだけでなく、表情や動作など身体を核にすべての感覚を駆使し、ほどよく他者を理解し心地よく過ごせる環境を探索する力であるとの認識が持たれ始めている。本研究の目的のひとつは、「身体的な感性」が身体的コミュニケーションを豊かにするための主要な部分を担っているという仮説の実証的な解明である。

上記会議では、教育における具体的な推進方法として、演劇・ダンス等の芸術表現を用いたコミュニケーション教育推進のための学習プログラムの開発が提唱されている。本研究では、演劇・ダンスといった表現活動の基盤となる幼児期の身体表現活動に着目し、介入プログラムの開発という実証的な研究にも着手している。今後は、「身体的な感性」を「他者や環境との身体を媒体とした双方向的な力」と操作的に定義し、幼児期において「身体的な感性」を育むための実証的な研究に進みたい。

【引用文献】

- 1 鈴木裕子 (2009) 幼児の身体的コミュニケーションにおける模倣の機能, 教育実践学論集 10, 57-67
- 2 鈴木裕子 (2009) 幼児期における模倣機能の類型化の有効性: 幼児の身体表現活動を焦点とした検討, 子ども社会研究 15, 123-136
- 3 鈴木裕子 (2009) 幼児の感性を具体化する試み: 幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして, 保育学研究 47-2, 132-142
- 4 桑原敏雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送協会, 24-34
- 5 樋口聡 (1994) スポーツをめぐる美学的諸問題, 遊戯する身体, 大学教育出版, 127-143
- 6 クルト・マイネル, 金子明友訳 (1998) 動きの感性学, 大修館書店, 3-8
- 7 Baumgarten, Alexander G. (1986) Aesthetica, G. Olms
- 8 九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻, <http://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/kss/>, (2011, 9, 20)
- 9 三浦佳代 (2000) 4 章: 感性認知 行場次朗, 箱田裕司編, 知性と感性の心理, 福村出版 61
- 10 志岐幸子 (2003) 感性の仕組みと働き, 臨床スポーツ医学 20-9, 1062
- 11 桑子敏雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送協会
- 12 水野邦彦 (1996) 美的感性と社会的感性, 晃洋書房
- 13 前掲書 6
- 14 前掲書 11, 4
- 15 前掲書 12, 216
- 16 宮脇理 (1988) 感性による教育—学校教育の再生, 国土社, 147-151
- 17 山本朝彦 (1993) 感性による教育をめぐる考察, 宮脇理, 山口善雄, 山本朝彦〈感性による教育〉の潮流—教育パラダイム転換—, 国土社, 32-34
- 18 ニコラ・フィエヴェ (2010) 基調講演: 西洋思想における「感性」概念について: あるフランス人建築史家が日本の家と庭の伝統的な風景に見た感性表現, 感性哲学 10, 9
- 19 佐藤朔訳 (1980) 雄鶏とアルルカン/音楽をめぐるノート, ジャン・コクトー全集, 第 1 巻, 創元社, 6
- 20 小林宏 (1990) 「感性学」入門, 産能大学出版部, 56-58
- 21 前掲書 17, 33
- 22 前掲書 12, 219
- 23 前掲書 12, 220-222
- 24 前掲書 12, 227
- 25 宮脇理 (1993) 〈感性による教育〉の潮流—教育パラダイム転換—, 国土社, 33
- 26 前掲書 20, i - iv
- 27 前掲書 17, 33

- 28 樋口聡 (2005) 身体教育の思想, 勁草書房
 29 樋口聡 (2002) 学習論として見た「身体感性論」の意義と可能性: R. Shusterman の所論をめぐって, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第1部第51号, 9-15
 30 Shusterman, R. (1984) The Object of Literary Criticism, Konigshausen & Neumann
 31 佐藤学 (1997) 学びの身体技法, 太郎次郎社, 19
 32 大友照典 (2001) 体育科教育 2001. 02号, 大修館書店
- 註) 文部省が「体ほぐしの運動」を全国に示してから、全国で「ダンス式ほぐし」「レクリエーション式ほぐし」「癒し系ほぐし」「体操式ほぐし」など、各専門家が独自にとらえた「ほぐし」が登場し、現場は少し混乱していたように思える。2000年3月、同省から「体づくり運動」指導資料が出版され、何をどうすればよいか方向が定まったようだが、いまだに実施方法やその注意点などの不安や疑問が残っているのも事実である。
- 「体ほぐしの運動」は、生涯体育・スポーツを念頭に置きながら、子どもの体力・運動能力の低下や、運動好きと運動嫌いの二極化などの問題を解決するために考えられたものである。そして、いじめや不登校に代表される人間関係の中でおきる問題やストレス増大など、青少年の心や体の問題を解決する糸口になることが期待されている。
- 新指導要領が、『心と体を一体としてとらえ』という目標を掲げ、保健分野の重要性と「体ほぐしの運動」の導入を強調しているのも、子どもの実態にあわせると同時に、これからの日本人の健康や体力に目をむけた新しい体育・保健体育の指導を提案しているのである。
- しかし、まったく新しい運動を作ったわけではなく、今までの運動やスポーツの部分を見方や考え方を変えて組み立てたとも言える。例えば、昔の子どもの遊びにも注目し「伝承遊び」を扱っている。また、私たち教師が、これまでの授業の中で行ってきたちょっとしたレクリエーションや遊び、スポーツ種目に入る前の動きづくり、ストレッチ体操やマッサージなども扱っているのである。
- 33 前掲書 28, 138
 34 志岐幸子 (2003) エリートジュニアサッカー選手の心理特性: アスリートの感性研究へのアプローチ, 早稲田大学大学院人間科学研究科博士論文, 20-38
 35 志岐幸子 (2003) スポーツにおける超常体験, 臨床スポーツ医学 20-7, 795-800
 36 志岐幸子 (2003) 感性の仕組みと働き, 臨床スポーツ医学 20-9, 1061-1070
 37 志岐幸子 (2003) スポーツにおける感性の力, 臨床スポーツ医学 20-10, 1229-1236
 38 前掲書 34, 130
 39 前掲 7
 40 根津知佳子 (2006) 語り出す身体, 感性工学会感性哲学部会編集委員会編, 感性哲学 6, 3-20
 41 根津知佳子, 森脇健夫, 松本金矢 (2006) 子どもたちの“感性”を可視化する, 感性工学会感性哲学部会編集委員会編, 感性哲学 6, 108-119
 42 前掲書 17, 32
 43 伊藤精男 (2006) 「組織的知」の転移と「関係的身体」: 場に埋め込まれた身体の視点から, 感性工学会感性哲学部会編集委員会編, 感性哲学 6, 67-80
 44 中村敏枝 (1997) 「間」の解明, 感性の科学: 感性情報処理へのアプローチ, サイエンス社, 83-87
 45 伊福部達 (1997) “気配”を探る, 感性の科学: 感性情報処理へのアプローチ, サイエンス社, 88-93
 46 佐藤誠 (1997) ジェスチャーからの感性情報, 感性の科学: 感性情報処理へのアプローチ, サイエンス社, 88-93
 47 吉川左紀子 (1997) 表情とコミュニケーション, 感性の科学: 感性情報処理へのアプローチ, サイエンス社, 141-145
 48 廣瀬通孝 (1997) 手の握り感覚の分析と合成, 感性の科学: 感性情報処理へのアプローチ, サイエンス社, 104-109
 49 山本正信 (1997) 動きの美しさの分析, 感性の科学: 感性情報処理へのアプローチ, サイエンス社, 141-145
 50 今泉敏 (1997) 声による感性情報の認知, 感性の科学: 感性情報処理へのアプローチ, サイエンス社, 57-61
 51 山本正信 (1997) 動きの美しさの分析, 感性

- の科学：感性情報処理へのアプローチ，サイエンス社，141-145
- 52 前掲書3
- 53 山口善雄（1993）平成っ子の感性，宮脇理，山口善雄，山木朝彦，〈感性による教育〉の潮流—教育パラダイム転換—，国土社，116-117
- 54 前掲書3
- 55 文部科学省「コミュニケーション教育推進会議」の開催について，http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/05/1294036.htm（2011，9，20）

本研究は平成23年度科学研究費・基盤研究(C)による研究成果の一部である（課題番号23500712）。

A Study on the Concept of "Physical KANSEI"

Suzuki, Yuko*

This paper aims to speculate the concept of "Physical Kansei" from several perspectives. First is the definition and significance of the term "Kansei" and its transition over time. Second is the research trend to visualize it with focus on physical involvement. Third is the active response of children as part of Kansei. It was found that Kansei has social significance in its connection with body and bodily sensation. I have operationally defined "physical Kansei" as "interactive movement through the body with others and the environment." The next stage would be to consider factual evidence on what nurtures "physical Kansei" during childhood.

キーワード：感性, *kansei*, (*Sensitivity*), 身体性 *Embodiment*,
身体的コミュニケーション *physical communication*